

百万

古名

嵯峨物狂

又

嵯峨大念佛

觀阿弥作

季は	地は	ワキ
子方	狂言	シテ
三月	門前の者	百万
京都	百万の子	吉野の人

「竹馬にいざや法の道。く。誠の友を尋ねん。

「是は和州三芳野の者にて候。又是に渡り候ふ幼き人は。南都西大寺のあたりにて拾ひ申して候。此頃は嵯峨の大念佛にて候ふ程に。此幼き人を連れ申し。念佛に参らばやと存じ候。

シテ詞

「あら悪の念佛の拍子や候。わらは音頭を取り候ふ

べし。南無阿弥陀仏。

地「南無阿弥陀仏。

シテ
「南無阿弥陀仏。

地「南無阿弥陀仏。

シテ
「みだ頼む。

地「人は雨夜の月なれや。雲晴れねども西へゆく。

シテ
「あみだぶやなまうだと。

地「誰かは頼まざる。誰か頼まざるべき。

シテ
「是かや春の物狂。

地「みだれ心か恋草の。

シテ「力車に七くるま。

地「積もとも尽きじ。

シテ「重くとも。 輓けやえいさらえいまと。

地「一度に頼む弥陀の力。 頼めやたのめ南無阿弥陀仏。

地「げにや世々ごとの。 親子の道にまとはりて。 く。

猶子の聞を晴れやらぬ。

シテ「朧月の薄曇り。

地「わづかに住める世に。 尚三界の首枷かや。 牛の車

のとことはに。 何くをさして引かるらん。 えいさ
らえいさ。

シテ「輓けや輓けや此車。

地「物見なり物見なり。

シテ「げに百万が姿は。

地「本よりながき黒髪を。

シテ「荆棘のごとく乱して。

地「旧りたる烏帽子引きかづき。

シテ
「又眉根黒き乱墨。

地
「うつし心か村鳥。

シテ
「憂かれと人は添ひもせで。

地
「思はぬ人を尋ねれば。

シテ
「親子のちぎり麻衣。

地
「肩を結んで裾にさげ。

シテ
「すそを結びて肩にかけ。

地
「筵切。

シテ
「菅薦の。

地
「みだれ心ながら南無釈迦弥陀仏と。信心をいたす

も。我子に逢はんためなり。

シテ
「南無や大聖釈迦如来。我子に逢はせ狂氣をもどさ
め。安穩に守らせ給ひ候へ。

子詞
「如何に申すべき事の候。

ワキ詞
「何事にて候ふぞ。

子
「是なる物狂をよくく見候へば。古郷の母にて御

入り候。恐れながらよその様にて。問うて給はり候へ。

ワキ 「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。やがて問うて参らせうするにて候。いかに此なる狂女。おことの国里は何くの者ぞ。

シテ詞 「是は奈良の都に百万と申す者にて候。

ワキ 「それは何故かやうに狂人とは為りたるぞ。

シテ 「夫には死して別れ。只一人ある忘形見の翠子に生

きて離れて候ふ程に。思ひが乱れて候。

ワキ 「さて今も子と云ふ者のあらば嬉しかるべきか。

シテ 「仰せまでもなしそれ故にこそ亂髪の。遠近人に面をさらすも。もしも我子に廻りや逢ふと。車に法の声立てゝ。念佛申し身を碎き。我子に逢はんと祈るなり。

ワキ 「げに痛はしき御事かな。誠信心わたくしなくは。かほど群集の中に。などかは廻り逢はざらん。

シテ詞

「嬉しき人の言葉かな。それに附きても身を碎き。
法楽の舞をまふべきなり。囁してたべや人々よ。
忝くも此御仏も。羅睺為長子と説き給へば。

地 「我子に鸚鵡の袖なれや。親子鸚鵡の袖なれや。
百万が舞を見給へ。

シテ 「百や万の舞の袖。我子の行方祈るなり。

シテクリ 「げにや惟ん見れば。何くとても住めば宿。

地 「住まぬ時には故郷もなし。此世はそもそも何くの程ぞ

や。

シテサシ

「牛羊径街にかへり。鳥雀枝の深きにあつまる。

地 「げに世の中はあだ浪の。よるべは何く雲水の。身
の果いかに檜の葉の。梢の露の故郷に。

シテ 「憂き年月を送りしに。

地 「さしも二世とかけし中の。契りの末は花かづら。

結びもとめぬあだ夢の。長き別れと為り果てゝ。

シテ 「比目の枕敷波の。

地

「あはれはかなき契りかな。

クセ

「奈良坂の。児の手柏の二面。とにもかくにも僕人

の。なき跡の涙越す。袖のしがらみ隙なきに。思

ひ重なる年波の。流るゝ月の影惜しき。西の大寺

の柳陰。みどり子のゆくへ白露の。起き別れて。

いづちとも知らず失せにけり。一方ならぬ思草。

葉末の露も青によし。奈良の都を立ち出でゝ。顧

り三笠山。佐保の川を打ち渡りて。山城に井手の

里。玉水は名のみして。影うつす面影。浅ましき

姿なりけり。かくて月日を送る身の。羊の歩み隙

の駒。足にまかせて行く程に。都の西と聞えつる。

嵯峨野の寺に参りつゝ。四方の景色を詠むれば。

「花の浮木の龜山や。

シテ

「雲に流るゝ大井河。誠に浮世の嵯峨なれや。盛り

すぎ行く山桜。嵐の風松の尾。小倉の里の夕霞。

立ちこそ続け小忌の袖。かざしそ多き花衣。貴

賤群集する。此寺の法ぞ尊き。彼よりも是よりも。唯此寺ぞ有難き。忝くもかゝる身に。申すは恐れなれども。二仏の中間。我等ごときの迷ひある。道明らめんあるじとて。毘首羯磨が作りし。

赤栴檀の尊容。やがて神力を現じて。天竺震旦我朝。三国に渡り。有難くも。此寺に現じ給へり。

シテ「安居の御法と申すも。

地「御母摩耶夫人の。孝養の御為なれば。仏も御母を。

かなしげ給ふ道ぞかし。況んや人間の身として。などかは母を悲しまぬと。子を恨み身をかこち。感歎してぞ祈りける。親子鸚鵡の袖なれや。百万が舞を見給へ。

地「あら我子恋しや。

シテ「是程多き人の中に。などや我子の無きやらん。あら我子恋しや。我子給べなふ。南無釈迦牟尼仏と。狂人ながらも子にもや逢ふと。信心はなきを南無

阿弥陀仏。南無釈迦牟尼仏南無阿弥陀仏と。心

ならずも逆縁ながら。誓ひに逢はせて給び給へ。

ワキ「余りに見るも痛はしや。是こそお事の尋ぬる子よ。

よくく寄りて見給へとよ。

シテ「心強や。疾くにも名乗り給ふならば。かやうに恥
をばさらさじ物を。あら恨めしふは思へども。

地「たまく逢ふは優曇華の。花待ち得たり。夢か現
か幻か。

地「よくく物を案づるに。く。彼御本尊はもとよ
りも。衆生のための父なれば。母諸共に廻り逢ふ。
法の力ぞ有難き。願ひも三つの車路を。都に帰る
嬉しさよ。く。